

市川 稔

光学天文連絡会会報

No. 14 (1982-6)

Group of Optical and Infrared Astronomers
(GOPIRA)

光学天文連絡会事務局 (東北大・理) 発行

目 次

光学天文連絡会第4回総会メモ	1
第13回運営委員会報告	5
海外中口径WGメモ	7
事務局より	8

お 知 ら せ

◎望遠鏡WG	6月/5日	/ 3時
◎体制WG	6月/6日	/ 1時- / 2時
	...	
◎運営委員会	6月/6日	/ 3時- / 8時

場所はいずれも 東京大学・天文学教室会議室

光学天文連絡会第4回総会メモ

日時 1982年5月20日 18時-21時
場所 東大 天文学教室講義室
出席 54名
議長 平田竜幸
議事

1. 1981年度会務報告。(小暮)

- (1) 1981年度開催の会議、会報発行等は会報No. 13 (P. 5-6)に記載のとおりである。
(2) 会計報告。

1980年12月1日-1982年5月4日までの収支決算は次の通りである。

(単位 円)

収入	支出
会費 # 173000	事務雑費 3890
	謝金 15600
	送金通信費 129345
	次期繰越金 24145
計 ¥173,000	計 ¥173,000

#前受会費3名分をふくむ

2. 1981年度 活動報告。(石田憲一)

1981年度の活動報告は会報No. 13 (P. 9-14) に記載の通りである。要約すると、光学天文連絡会発足 (1980年12月1日) 以来各種会合によって、光学・赤外天文学関係の観測設備の将来計画について、大筋の合意が得られた。合意の内容は①国内適地に3m程度の経緯式光学を早急に設置する、②海外適地に中口径の赤外・光学望遠鏡を早急に設置する、③将来、海外に超大型望遠鏡を建設する、④各種附属観測設備の開発をはかる、の4項目である。

3. 1982年度運営委員と役員。

運営委員の選挙結果が会報No. 11の通り事務局より紹介され承認された。

運営委員 (機関別に再録する。)

兼古 昇 (北大理)、田村眞一 (東北大理)、小平桂一 (東大理)、

磯部 三、清水 実、西村史朗、家 正則、寿岳 潤、石田憲一、山下泰正、安藤裕康 (東京天文台)、若松謙一 (岐阜工短大)、小暮智一、市川 隆、佐藤修二 (京大理)。

運営委員長=小暮智一

同 補佐=磯部 三

補佐については規約ない役職なので、これを来年度以降の前例としないとの了解の下に、両氏の人事が承認された。次に報告事項として、事務局は東北大におき、事務局長=田村眞一、事務連絡係=斎藤 衛 (関西地区)、磯部 三 (東京地区) とする。各WG世話人も会報No. 13 (P. 7) の通りである。

4. 1982 年度活動方針。

活動方針原案は会報No. 13 (P. 18-19) に記載されているが、第1/2回運営委員会 (1982-5-17) で若干修正されたものが総会に提案された。総会では細部の文面に立入らず、大筋として方針案を承認した。それを次に示す。

昭和57年度光学天文連絡会活動方針

1. 活動の目標

昨年度中に、将来計画についての合意が得られた。昭和57年度は計画の具体化の年である。

- a) 天文学将来計画 (天文研連) 作成作業への寄与。
b) 全国光学天文研究者の共同利用体制を組んで、望遠鏡建設を進めるため、理念、方法を明確にして、3m経緯台、および海外中口径望遠鏡の仕様を具体化する。
c) 同時に①大型望遠鏡の新技术研究、②諸外国との国際協力による観測的研究、③観測施設の海外設置について検討を進める。

2. 活動計画

- a) シンポジウム、研究会等の開催。
☆光天連シンポジウム (11月、10日前後を予定)
将来計画
共同利用 (現行、岡山、木曾を含む)
星、銀河、宇宙の天文学の展望
☆シュミット シンポジウム (9月29-30日ごろ)
b) 総会 (5月)、運営委員会の開催および会報発行

c) 各WGの活動

☆体制WG

全国光学天文研究者の共同利用体制の中心となる共同利用施設の ①業務、②人員、③組織、④予算規模、⑤運営方法、⑥整備の年次計画、⑦日本全体から見た将来像、

☆望遠鏡WG

①3m経緯台望遠鏡の仕様、年次計画、
②海外設置の大型観測施設、
③海外へ持ち出す観測装置、

☆海外中口径望遠鏡WG

①赤外、測光に力点を置いた中口径(1m-2m)望遠鏡
②設置場所
③概算要求の窓口

☆国際協力WG

①観測施設の海外設置
②諸外国との協力による観測的研究

d) PR

☆国内3m

☆海外望遠鏡

両者が conflict しないこと(一体性、相補性、緊急性)、事務局内にPR担当係をおく。

研連での討議と平行してPR活動をすすめる。

5. 活動方針案に関する討議と当面の行動計画。

総会では活動方針全般にわたって熱心な討論があったが主なものを要約する。なお、順不同である。Q: 質問、A: 答弁、C: コメント

(1) 海外中口径について

- Q. 海外大型との関係をどう考えるべきか。
- A1. 海外中口径は海外に前進基地をおくことに意義があり、将来、海外大型ができて副望遠鏡として有意義である。
- A2. 海外中口径はそれ自身でも Absolute に天文学的に意義のある望遠鏡である。
- C. 海外中口径は海外大型の前進基地として意義があり、口径にこだわるべきでなく、50cmでもよいのではないか。
- C. 赤外線、銀河を考えると1m以上はどうしても必要である。また、共同利用として前進基地にするためにも1m以下では不適當である。
- C. 緊急性としては ASTRO-C (1987~89)がある。それを目標とすべきだが All or nothing ではない。

C. 国内と海外とを可視と赤外ということで、はっきり分けたらどうか。名目的にすっきりし、それなら2mでも通りやすいのではないか。

(2) 国内3m望遠鏡について。

- C. 国内3m望遠鏡の仕様はかなり煮つまっている。
- Q. 国内大型の社会的にアピールする点はどこか。
- A1. 高分散分光、微光天体の分光が目玉の一つとなる。15~20等級を10~50 A/mmで分光できるようになれば新しいタイプの恒星活動変光星などの発見が期待できる。
- A2. 国内大型には海外超大型へ向っての技術開発という実験機的側面が大きい。その性格を前面に出してもよいのではないか。
- Q. F/2 の技術的可能性をさぐるのはどういう意味があるか。
- A. 海外超大型となると、設計上、また経費上 F/2 という短焦点がきわめて厳しい条件になる。国内3mでその面の克服を試みるのは当然である。

(3) 国内大型、海外中口径の関係について。

- C. 三者(海外超大型をふくめた)の一体性、必要性、緊急性をもっと強調すべきである。
- C. 二者の関係についてはそれぞれの関係グループが具体的に推進し、光天連としてはそれを支持するというのが現実的である。
- C. 光天連には国内3mを優先するという昨年秋にきまった方針があるからそれに従ってすすめるべきだ。
- C. 計画のすすめ方にはもっと柔軟性があってもよい。物事は必ずしもきまったとおりにすすむものではない。

(4) 当面の計画について。

- 1) 6月の天文研連にむけて、三者一体を基調とした光天連の方針をまとめ、その方針の承認と推進を研連にもとめる。
- 2) 国内3m、海外中口径の仕様、窓口、推進体制等の具体的計画案のつめは、それぞれ必要なWGで検討をすすめ、11月の光天連シンポジウムで具体案の呈示ができるよう努力する。

第 / 3 回運営委員会報告

日時 1982年 5月21日 12時45分-16時30分

場所 東京大学理学部天文学教室小講義室

出席 小暮、兼古、田村、清水、寿岳、石田、安藤、磯部、市川、佐藤、西村、
佐々木、仲野、平田、松本、野口

1. 総会のまとめ.

- ・活動方針 (別項) の了解を得た。

- ・次のような事が共通認識として確認された。

国内3m、海外中口径、海外大口径望遠鏡計画を一体として推進する。

国内3m望遠鏡の仕様書を作る。海外中口径望遠鏡計画の窓口および仕様書の具体案を作る。

- ・行動日程の了承

6月の天文研連において、望遠鏡計画を天文学全体の立場から承認し、推進されるよう要請する。/ 2月の天文研連において外部への働きかけを含め計画の具体化を推進されるよう要請する。

望遠鏡シンポジウムを / 1月ごろ開く。その具体的準備を行う。

6月中に各WGの報告をまとめ、運営委から天文研連に報告する。

東京天文台内部では5月・6月に3m望遠鏡案を検討し、7月の談話会で発表し、計画を認めてもらう。その後、東京天文台将来計画委員会で議論を進め、/ 2月ごろの教授会で昭和59年度概算要求に含めることを認めてもらう。

京都大学理学部の三つのグループで海外中口径を推進できるかを早急につめる。名古屋大学理学部が海外中口径の窓口になる可能性を検討する。

2. 当面の活動計画.

- ・本年度の活動計画.

総研 (A) (代表者、石田氏) と総研 (B) (代表者、山下氏) に期待する。昨年度は、200万円程を光天連関係の研究活動に総研 (B) (代表者、小暮氏) から支出されている。

支出予定: 運営委員会と各WGの活動費は昨年度より大分多くなる。シンポジウムの規模は昨年より拡大する。

PR用パンフレットを作る。会報の紙代・郵送料を考える。

- ・PR用パンフレットは光天連の全体計画のものと、それぞれの窓口研究機関が作る具体的なものとを準備する。

- ・各WGは次のような事を検討して行く。

「望遠鏡WG」

△3m望遠鏡の仕様を収束させ、次回運営委員会前に現在の段階で決められるものを6月中旬までに決める。文章、仕様、予算規模。

△設置場所の検討をする。

△59年度より本予算がつくように東京天文台での努力を期待する。

「体制WG」

△望遠鏡WGと海外中口径WGの間の橋渡しの役目をはたす。

△東京天文台と光天連の間の橋渡しの役目をはたす。

△Best site、Best telescope の建設を最終目標とし、そのための体制がどうあるべきかを検討する。

△3m望遠鏡計画はその予算の半分程度が望遠鏡、ドームで、残りの半分は Best site の Best telescope のための新技術開発、観測装置の開発費になる。

△海外中口径計画に機器開発を含めるのは重荷になる。

「海外中口径WG」

△小まわりのきく計画として進める。

△光天連全体の計画とよくマッチした計画とする。

△5月/7日に提出された報告書は、全体的な計画としては不適當な部分があるので、もう一度練りなおす。

△赤外線専用望遠鏡にするべきであるという意見があったが、その可能性を検討する。

△研究センターとして計画を進める是否を検討する。

△窓口機関が京都大学であるか名古屋大学であるかによらず、望遠鏡建設には、先に進んでいる3m望遠鏡建設グループの協力が必要であり、それにより、Man Power の困難は軽減されようと考えられる。

「国際協力WG」

△観測施設の海外設置のための努力。

△諸外国での観測を海外学術調査によって進めてゆく。

- ・各WGの日程は後日連絡。

3. その他.

- ・スペース・テレスコープの窓口について検討する。出てきたデータ (公開されたもの) を利用する窓口が必要らしい。金沢工大グループとの関係を調整する。国際協力WGがNASA等とcontact して明らかにする。

海外中口径WGメモ.

日時 1982年 5月21日 17時-19時30分

場所 東大天文学教室会議室

出席 磯部、西村、松本、佐藤、平田、市川、小暮 (以上委員)、清水、安藤、野口、村上、下田

司会 小暮

I. 問題点のまとめ.

第4回総会、第13回運営委員会での討議を通じて海外中口径計画のかかえている問題点がはっきりしてきた。それは次の3点である。

- (1) 望遠鏡 (性格と仕様)
- (2) 窓口と推進体制
- (3) 共同利用体制

II. 望遠鏡

- 現在、海外中口径WGから出ている2m案は国内3mに比較して重たいという印象がつよい。
- 天文学的意義、共同利用体制ということを考慮し、当面は1.5~2.0mで考える。
- 赤外・測光に重点をおき、単能に近くして2mにという案と、さらに撮像、分光まで仕様に含めたセミ万能型で1.5mという案が考えられるが、国内3mとの関係を考えて前者の方がよい。
- 赤外に大きなウエイトをおくべきである。
- 計画案としては赤外・測光望遠鏡でよいが、銀河のことを考えると視野は8-5分はとれるようにしておくべきである。
- 2mが1.5mになっても経緯儀の方が楽ではないか。開発費は国内3mのノーハウを前提として、もう必要ないといえるだろうし、将来重くするにも経緯儀の方がよい。ソフトも簡単にこなせるだろう。
- 経緯儀でやるということを基礎にして今後の検討をすすめよう。
- 計画のすすめ方の考え方としては、
 - 1) 口径は1.5~2.0mの範囲で天文学的意義と予算のかねあいで最適値をきめる。(予算は国内3mとcompeteしないですすすめられる範囲とする)
 - 2) 共同利用体制をとる。(従って、口径、予算規模もあまり小さくできない)
 - 3) そして出来る限り早急に。

III. 窓口と推進体制.

- 窓口は可能性の大きいところで最大限努力する。
- ハワイとの窓口は6月の天文研連のあと一体化し、具体的な交渉も始めるべきである。
- 前回の海外中口径WGの報告書は上記の意見を参考にして改訂版を作る。(京都で原案を考える。)
- 共同利用体制は京都が中心になって検討する。

◎事務局より

皆様の御協力により1982年度会費納入は現在40%に達しております。未納の方はできるだけ早く御納入下さい。
なお会員の異動などありましたら、早目に事務局までお知らせ下さい。

事務局

〒980 仙台市荒巻字青葉 東北大学理学部天文学教室

光学天文連絡会事務局 田村 眞一

☎ (0222) 22-1800 (3324)

郵便振替口座

口座番号 仙台3-18/83

加入者名 光学天文連絡会